



教職大学院 Newsletter No. 59

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.2.15

教師教育者のアイデンティティ

東京学芸大学 教授 岩田 康之

今回、福井大学教育地域科学部および教育学研究科の外部評価委員を務め、ここで行われている教師教育の実践や地域人材の育成に関する実践の実情をつぶさに見る機会を得た。特に福井大学の教職大学院は、「学校拠点方式」の実践コミュニティをキーコンセプトにして、豊富な〈省察〉を取り入れたプログラムが外からも注目されていることもあり、私自身も興味津々であったので、この外部評価委員のお誘いは「渡りに船」であった。

私は十年ほど前、日本教育大学協会の「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクトのメンバー（途中から委員長）として、〈体験〉－〈省察〉の往還を基軸にし、そのための〈協働〉体制を確立させることを含めたカリキュラムづくりの提案をまとめている。福井大学教育地域科学部学校教育課程のカリキュラムにおける三つの「教育実践研究」もその提案のひとつの現れとして捉えられるが、その充実ぶりは教員養成系大学・学部のカリキュラムの中で抜きん出ているように見られる。三つの「教育実践研究」を最大限履修して「教職実践演習」に臨むと28単位となり、これは学部学生の学びの四分の一に相当する。「コア」の充実ぶりは、量的な面だけを見てもよくわかる。こんなに忙しくて学生は大丈夫だろうか、とかえって心配に思っただけである。

そしてこの「こんなに忙しくて大丈夫だろうか」という思いは、教育地域科学部・教育学研究科の外部評価のための資料を読み進める中で、先生方に対しても抱いた。資料に現れ、そしてそれぞれの先生方から説明を受け、この学部・研究科の先生がたいへん多方面に関してアクティブであるということは今更ながら痛感した。教師や地域人材を育てるという営みに関わって、それぞれのカリキュラムの充実はもちろんのこと、地域のニーズに応じた取組、国際連携の取組、先生方の外部での活躍、附属学校園や地域の学校を巻き込んだ実践研究等々、少ないスタッフで実によくやっているし、それぞれのニーズをうまくすくい取っていると思う。しかしながら、「これだけいろいろやっていて、先生方は研究する余裕があるのだろうか？」とふと思ってしまったのである。

私が思うに、「大学における教員養成」原則の重要な含意の一つは、「第一線の研究者が教師教育に関わる」ということである。第一線の研究者とは、「ここまでは

人知で解き明かした、でもここから先は未解明である」というギリギリのところまで調べ・考えている研究者のことである。そういう第一線の研究者が教師教育に関わることで、「決められたとおりにやればよい」というマニュアル化された存在から脱して自ら課題を発見し自ら解決できる教師たちが育つのである。

ただ、この「調べ・考える」ことにじっくり取り組む余裕は、外からのニーズにそれぞれ対応している中ではなかなか難しい。私自身に関して言えば、ここしばらく西欧流の、キリスト教を背景にした「profession」として教職を捉える考え方は東アジアの仏教・儒教を背景にした「師」としての教師像と相容れないのではないかと考え、実際に東アジア各地の教師たちの育つ現場でのフィールドワークを手がけながら、そこで得た知見をうまくまとめることがなかなか叶わないでいる。

それでも、私のように「教師の育ち」それ自体を研究対象としている教育学研究者は、教育の実践性を求める外のニーズに比較的合わせやすい。問題は、教育実践とは直接に関わらない研究対象を持つ研究者の、教員養成系学部におけるアイデンティティのありようではないか。前述の「モデル・コア・カリキュラム」で私たちのプロジェクトが〈協働〉を提案する中で、学内・学外の多くの人の共通理解に基づく教師教育の充実を唱えたが、それは多くの場合、いわゆる教科専門の先生方が教育実践にコミットすることへの要請として作用してしまったようであるが、教科専門の先生方が単に実践研究的なものに阿るだけでは角を矯めて牛を殺すことになってしまうのではないか。教育実践に直接関わらない研究対象においても第一線の研究者としてのアイデンティティを保てることが、実は教師教育自体の充実にもつながる、という逆説に、今回の外部評価を通じて思い至った。

この点で教大協プロジェクトを仕切った私は「戦犯」なのかもしれない。そんな贖罪意識からか、外部評価の席で「カラダは売っても心は売らない」が大切だ、などといささか不謹慎な発言をしてしまった次第である。外のニーズに応じるだけでなく、先生方にはきちんとした研究者としてのアイデンティティを保っていてほしい、と切に思う。

冬期集中講座に参加して

スクールリーダー養成コース2年／福井東特別支援学校月見分校 徳丸 郁子

昨年度私は、冬期集中講座に2回（6日間）参加した。M2の先生方の雰囲気、毎月の合同カンファレンスなどとは異なり、緊張感が漂っていたことを覚えている。

しかし、その雰囲気をちょっと忘れかけていた頃、ある文章がメールに添付されてきた。「『長期実践報告』執筆スケジュールの目安」！・・・そこに書かれてあった文面「『実践中だから』『忙しいから』と、相談・構想・執筆を後回しにしないようにしましょう」「不安を感じる方は、早めに主担当教員と相談して自己管理しましょう」が、心に突き刺さるようであった。しかし、今後予想される校内での校務分掌や担任する学級のことを考えると、この集中講座でできるだけスムーズにレポート作成をすすめたいと思って取りかかった。

事前に笹原未来先生より「構想（あらすじ）をつくってみてください」「目次のタイトルを追ってだけで、話の大筋がわかるようなものを・・・」「何がしたいのかということが端的に表れるようなサブタイトルを・・・」「キーワードを考えて・・・」とアドバイスをいただいていた。私は、レポートを書く時に毎回「このことで私はみんなに何を言いたいのだろう」と自分の言いたいことが何かかわからず、そしてだらだらとした文章にしかならないことに落ち込んでいた。今回も案の定、構想（あらすじ）を書くことに悩んだ。「私は何が言いたいのだろう」と・・・。

とにかく、自己嫌悪に落ち込みながらも、これまで書きためておいた記録やその時に率直に感じた感想などをつなげながら、時系列で書いていくことにした。そうして書いたものを途中で読み返してみて「なぜ、その実践

をしたのか」「そこでどんな風に考えたのか」を自分に問いかけてながら、出てきた思いや感情を書き加えていこうと考えた。そうして書き進めていくことで、いくつもの学びや変化が生まれていることに気づかされた。

まず、現任教や教職大学院での学び、そして教師としての今の自分を支えているものの原点となるものが、新採用時代の複式学級での経験であり、大規模小学校での学級経営であり、特別支援学級での学び、考え方であった。それがその時々で終結しているのではなく、つながり、重なりながら現在に至っていることに改めて気づかされた。そして、さらにそのつながりが現任教での一年一年の実践につながり、積み重なってきていることを実感できた。

また、自分の考えや関心、校内研究や同僚の先生方に対する気持ちがまだほんの少しではあるが変化していることにも気づくことができた。それは、これまでの実践のつながりや積み重ねに、教職大学院での合同カンファレンスやラウンドテーブルなどでの学びや考えたこと、人と語り合うことや意見、質問を出し合いながら、それぞれの考えを紹介し合うことによって生まれてきた考えや感情と一緒に巻き込みながら、さらに変化してきたように思う。そして、その変化は、「教員としての変化」というのはもちろんであるが、「私個人の変化」にも関わっているという感覚が生まれている。

それはまだ相変わらず「何となく」ではある。そして、レポートのゴールも全く見えてはいない。しかし、この6日間で、教職大学院での2年間そしてそれまでの教員生活や自分自身を見つめることができた。

スクールリーダー養成コース2年／美浜町美浜中学校 高木 誠

苦しい時間だった。こんなに自分を見つめた時間はなかっただろう。合計6日間。非常に長いようで、短い振り返りの時間であった。その間にあった、脳が仕事を受け付けないというような経験は、初めてのような気がする。長期実践報告書をまとめるに当たり、自分を振り返る時間にどっぷりとつかった。年末の前半戦は、自分の教員人生を振り返り、そして今までのインターン生との関わりを振り返った。年始の後半戦は、これまでの取り組みを振り返った。いろいろと、周りに助けられながらのこれまでだった。困ったことがあったとしても、何かとついている私は、常に手助けをしてくれる方々に救われてきた。ありがたい話である。

昨年度から、研究主任となった。本校の研究は、教科の枠を超えた小グループによる、公開授業を中心とした

授業研究である。この小グループのグループセッションは、教職大学院でのやり方を参考にしたものである。歴代の研究主任が苦勞をしながら改革を行ってきた結果、順調に進むようになってきた。従って私は、何をしていたかを分からないまでも、これまでの流れを踏襲しながら進めることができた。そして、合同カンファレンスでその悩みや課題を話すことで、グループの方々からさまざまなヒントをいただいた。そこから自分なりに実践していった結果、同僚の先生の支えもあり、何とか進めていくことができた。ありがたいことである。

本校の職員構成は若い。新採用教員も必ず毎年入ってくる。従って、本校のやり方が初めてということであるならば、そのやり方に従う。従う他にないというべきである。小学校から異動してきた先生は、中学校のやり方

に遠慮する。中学校のやり方がそうならば、それに従おうとしてくださる。そして、思うところの意見は、建設的である。他地域から異動してきた先生は、美浜中のやり方に従おうとしてくださる。そしてやはり、意見は建設的である。そんなところがうまく循環し、本校の研究のよいところが継続されてきている。さらに、拠点校として教職大学院から公開授業にいつも来ていただける先生方には、本校の研究を常に誉めていただいている。本校教員が公開授業で行うことを、「チャレンジ」として認めてくださる。さらに課題については、あたたかいア

ドバイスで解決へのヒントをいただける。本当にありがたいことである。

まだまだ課題は多く、いろいろと整えていかねばならぬことはある。しかしながら、職員みんなで一つの方向へと向かっていく手ごたえは感じ取れる。これが教員全体でのメンタル・モデルとなっていくのが理想である。力不足であるが、何らかの形が取れるよう、周りの先生方の協力を得ながら、進めていけたらと思う。今回は苦しい6日間であったが、こんなことを、自分に都合よく受け取った振り返りの時間であった。

スクールリーダー養成コース1年／福井県立足羽高等学校 片桐 哲也

冬期集中講座は、大学院1年目と2年目とでは、その主たる目的に大きな隔たりがある。私は1年目ということで、今年度を振り返り、来年度に向けて展望を拓くことが最重要であるが、2年目の人は、長期実践報告書の最後の詰めの段階に入っており、張り詰めた緊張感と慌ただしい雰囲気満ちていた。私も来年の今頃は同じようになるのだろうかと思ひながら、12月24日から27日までの3日間、来年度に向け、今年度の取り組みの再構成を図るべく、課題に向き合った。

まず、福井大学教職大学院教授柳沢昌一先生は「俯瞰」という言葉を用いて、今回の冬期集中講座への取り組み方をレクチャーされた。「『俯瞰』とは、『ものごとを展望を持って捉え直すこと』であり、今回の冬期集中講座は、将来への展望なしで、単純に実践のユニットを並べていくのではなく、一度、全てを配置した上で、もう一度、自分で掴み直すことが重要になってくる。さらに、今後5年間の展望できれば、数十年単位での枠組を構築することも可能になってくる。」と述べられた。私たちは、あることを実践し、反省するというサイクルは何となくやってきたように思うが、そのサイクルが1年間や5年間といった長期に亘る場合の意味づけや将来への展望といった視点を持って捉え直すことをあまりしてきていないのではないかと改めて感じた。

この3日間を通して、自分のこれまでの実践記録を吟味して読み進めていく中で、その当時思ったことと現在思っていることにギャップを感じるがあった。それは、柳沢先生の言葉を借りれば、「ある段階で、精一杯捉えようとしていたものがいくつもの実践を通して、捉え方が大きく変化していることの表れである」と言える。私は、このギャップを大切に、来年度への取り組みに向け、実践の再構成を考えていきたいと思っている。

また、長期実践記録の構想を練っていると、実践相互間の関係性をどのように叙述するかという問題が自然と湧き起こってくる。柳沢先生は、「個々の取り組みが時間軸と同時並行に発展していくわけではなく、取り組み同士が互いに連動しており、そこには『揺れ』が存在する。」とおっしゃった。その「揺れ」というものを自分なりに吟味し、捉え直し、叙述の段階では、観念的なものを理論的なものに一步でも近づける努力が必要であると感じた。さらに、「種々の問題というのは階層構造を為しており、同一平面上での横での関係性ばかりに目を向けず、3次元的な問題の捉え方を模索し、その解決方法を3次元での関係性の中で見出すこと重要である」という新たな視点も学ばせていただき、今後の実践に活かしていきたいと考えている。

教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属小学校 木子 泰宏

長期実践研究報告書の提出を間近にひかえて、冬期集中講座が始まった。この期間中は、それぞれが長期実践研究報告書を書き進めるために、パソコンに向かっていった。今までの集中講座とは違い、やはり全員に程よい緊張感があつたように思う。担当教官である木村先生、他の院生とも話し合い、私の中では一応構想ができていた。それぞれの章で書きたいことも決まっていたため、この集中講座ではひたすら書き進めていくつもりであった。

しかし、実際にパソコンに向かってみると、なかなか文章にできなかった。当初の予定ではすらすらと進めることができるはずなのであるが……。予定を変更して、そのときそのときの記録を見て、当時はどう考えていたのか、そして今はどう考えているのか、そこから学

ぶべきことは何かということをもう一度考え直した。思ったよりも時間はかかったが、自分なりに満足のいくように書くことができたと思う。

このようにある出来事について、頭の中では何となく書くことが決まっても、実際には書くことができないということがよくある。それは自分が何となく反省した気になっているだけで、実際はそこから何も学ぶことができていないときに起こるのではないかと私は考えている。長期実践研究報告書の執筆は、私にそういった点を気がつかせてくれる。こうして記録をすることで初めて、本当の意味で省察できたといえ、次に活かすことができるようになるのではないだろうか。

この集中講座では「楽しい」と「面白い」の違いについて考えていた。「楽しい授業と面白い授業とは何が違

うのか。また子どもにとっての楽しさだけではなく、教師にとっての楽しさについても考えてみてはどうか。」これは私の長期実践研究報告書をご覧になった木村先生からのアドバイスである。私は『楽しい授業』について考えてきていたが、このアドバイスは予想外であった。

「楽しいと面白いに違いないってあるのだろうか。」それが私の最初の素直な気持ちであった。

テーブルでの話し合いにて、その点に関して、ヒントをもらうことができた。そうして何となくではあるが「楽しさ」の先に「面白さ」があり、私は『楽しくて面白い』授業を考えていかなければならないのではないかと考えた。

話し合いからヒントをいただくことができたので、自分なりにまとめて長期実践研究報告書に記したいと思う。

しかし、これも子ども視点の話であり、教師視点で考えると授業の「楽しさ」、「面白さ」というのは違ってくるだろう。木村先生は私の算数の授業にヒントがあるとおっしゃられていたが・・・。まだまだ考えなければいけないことがあるようだ。残りの時間はそう多くはないが、最後まで内容を吟味して、考察を深められるところはどんどん深めていきたいと思う。

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校 鈴木 馨

12月24日、刺すような寒い朝、眠い目をこすりながら急いで身支度をし、鯖江から45分じっくりかけて大学に到着し、平成25年度の冬期集中に参加させていただいた。世間では24日はクリスマス・イブ、25日はクリスマスである。今年のサンタさんのプレゼントは、教職大学院の先生方との交流会。最高に幸せなプレゼントだと感じた。

いつものことだが、合同カンファレンス、集中サイクルのときはコラボレーションホールの入口に、教職大学院のスタッフの先生方が作ってくださったレジュメが置いてある。私はいつも時間ぎりぎりにコラボレーションホールの駆け込むのだが、このレジュメを見るのが楽しみの一つである。今日どんなことをするのか、どんな先生方と語り合うことができるのか、どんな講義があるのか、いつもウキウキしながら見させていただいている。3日連続の冬期集中サイクルは、M1の学生は主に1年目を振り返り、まとめて執筆を進める活動、M2の学生は長期実践報告の最終段階の見直しという内容だった。1日目と2日目はM1とM2が入り混じった同じ小グループで話し合いを進め、3日目はストレートのM1の学生とスクールリーダーのM1の学生、M2の学生の3つに分かれ、スクールリーダーのM1の学生は1班6人程度の小グループになり、そこに教職大学院のスタッフの先生方が入ってくださり、お互いに1年目のまとめの進捗状況を語り合った。スクールリーダーのM1の学生は県教育研究所ミドルステップアップ研修との協働研究会を11講義室、13講義室に分かれて行った。M2の学生は特にグループは作らず、それぞれで大学の担当の先生と最終確認を行った。今回の冬期集中サイクルのテーマは、「専門職としての教師の力量形成のためのコミュニティ」であり、実践と省察と表明のために2つのサイクル「公教育の課題/学校と社会」「長期実践報告」を捉えなおすというものだった。私はこのサイクルで大きく2つのことを学ぶことができた。

1つ目は、生徒に対する先生方の支援や思いを知ることができたということである。1日目、2日目は同じグループで語り合いを行ったのだが、私のグループには石崎先生、片桐先生がいらした。話し合いを進めていくうち、それぞれの先生の現状を踏まえた、その生徒に対する支援を窺うことができた。特に片桐先生の「外国語は母国語より上にいくことはない。母国語は小さい

ときからの積み重ねである。国語では表現、プレゼン能力がいわゆるが、外国語も同じ。『聞く・読む』はinputで、『話す・書く』はoutputであり、inputとoutputのつながりが非常に重要だと思う。コミュニケーションは普段の学級活動から重要になってくると考える。」という言葉にはなるほどと思った。表現活動を1つとして考えるのではなく、inputとoutputに分類して考え、そのつながりの活動を生徒に合わせて考えるということは大きな意味があると感じた。

2つ目は、自分の1年間の学びを、仲間と、教職大学院の先生方と捉えなおすことができたということである。3月のラウンドテーブルに向けて、M1は1年目のまとめを報告書として形にするということで、私は冬期集中サイクルの1日目、2日目で報告書の章立てを行った。教職大学院に入学し、1年間を通して、インター先で、大学でどんなことを学んだのか、どんな思いでどんな授業実践を行ってきたのか、生徒とのかかわりはどのように変化していったかなどを紙に手書きで書いていった。3日目の語り合いの場では、仲間から、教職大学院の先生方からいろいろ助言していただいた。その中でも、佐分利先生の「自分の目標としているところはどこなの？目指す教師像は？そこがはっきりしないと、今行っている実践がどの位置なのか、プラスして何をしていけばいいのかということが見えてこないのでは？比べられないのでは？今までの過程にはなマークをつけて、全体を見ていく必要がある。」という言葉が印象に残っている。教職大学院に入学して目標を立てたが、果たして1年目なりに達成できたのだろうか…。インターンで経験を積む前と、今では目指す教師像は違うのではないかと…。佐分利先生の言葉からいろいろなもやもやが出てきた。柳澤先生の言葉を借りると、1年の記録をまとめて自分の言葉で実践と理論を結び付けていくことは、「経験を価値づける」ということであり、教職大学院ではそれを同年代の仲間と、現職の先生方と、教職大学院の先生方と経験の意味を振り返ることができると同時に自分自身に自信を与えることもできる。

上記の2つ以外にも、この冬期集中では多くの助言をいろいろな先生方からいただいた。また自分でその言葉を捉え直しながら報告書を書き進めていきたい。

板橋区立赤塚第二中学校 研究発表会に参加して

教職専門性開発コース 1年／丸岡南中学校

角谷 健大朗

私は、今回の赤塚第二中学校で3年女子サッカーの授業があるということを知り研究発表会に参加しました。自分自身の教科も保健体育ということやインターン校でサッカーの単元をもらい授業実践を行ったこと、また専門がサッカーということもあり迷わず参観を希望しました。また、初めて参加する研究会ということもありますが、インターンを行っている丸岡南中学校と共通している取り組み（教科センター方式など）があるので、赤塚第二中学校がどのような雰囲気なのかとも興味がありました。

体育の授業を参観した際、2クラス合同で4人の教科リーダーがいることに驚きました。その教科リーダーが先頭に立って準備体操やランニング行っていました。手を抜く生徒が見られませんでした。なにより生徒たちが準備運動を楽しそうに笑顔で取り組んでいる様子を見て衝撃を受けました。教科リーダーの存在がまわりに良い影響を与えている様子を見て、素晴らしい取り組みだと感じました。

分科会では様々な話し合いが行われましたが、特に印象に残っているのはICT機器の活用とインカムについての話し合いでした。電子黒板の存在は、子どもたちの興味を引くため、反応や食いつきが全然違います。ICT機器は教師が使慣れるまではとても大変なことではあります

が、使いこなすことができれば強い武器となります。今回初めてICT機器（電子黒板）を身近に感じたことによって、これからますます電子黒板やデジタル教科書が普及すれば、子どもたちの学びや成長につながってくる一方で、教師側に与える負担が増してくるのではないかと感じました。しかしながら、年代さまざまな先生たちがいる中、新しい取り組みを拒むことなく取り入れていこうとする姿勢がとても伝わってきて、これこそが協同だと感じました。また、インカムについては、インカムを導入した前校長先生が同じグループだったので、取り入れた理由や今後インカムをなくしていつてもらいたいという話をされていました。この時私は、別になくす必要はないのではないかと考えました。むしろプラスにとらえることができるのではないかと感じました。というのも、教科センター方式を取り入れている以上、どうしても教員同士の情報の共有が薄くなっているのではないかと考えています。その穴を埋めるための1つの方法ではないだろうかというヒントをもらったような感覚になりました。

今回の研究会を通して、学校の作りや取り組み、先生たちの熱い想いを聞くことでたくさんのことを学ぶことができ、自分にとってとても良い刺激となりました。この経験が無駄にせず、今後の実践に活かしていきたいと思えます。

教職専門性開発コース 1年／至民中学校

河邊 里紗子

赤塚第二中学校は、校舎が新しくきれいで、中は明るく木のいい匂いがしました。私は、校舎に入る前からわくわくしていたのですが、中に入ると、生徒が次々と挨拶をしてくれて、温かい気持ちになり、授業の様子を見られることが更に楽しみになりました。

校舎の中は、至る所に掲示物が貼られておりどの掲示物も興味深く、目を引くものばかりでした。家庭科室の前の壁には、生徒が作成した「お

せち料理や各地のお雑煮」についてまとめたポスター、食育に関する掲示物、被服実習で作ったTシャツや、授業で班ごとに作成した給食の献立などが所狭しと貼られており、これまでの学びの足跡が感じられて、教科センター方式の良さを改めて感じる事が出来ました。

家庭科室の横には、給食センターがあり、窓越しに給食が作られている様子などを見ることが出来るため、自分たちが食べている給食に対して身

近に感じる事ができ、より関心が湧くのではないかと思います。

私は佐藤先生の家庭科の授業を参観させて頂いてきました。先生が、一食の費用は300円ほどになることや、生モノは使用しないこと、成長期である生徒に合ったバランスを摂れる食事であることなどの条件を提示し、その条件を満たした給食の献立作成を行うために、栄養素等ごとに分類したものを描いたランチョンマットや、「野菜を美味しく食べるレシピ集」など、これまで自分たちで作ってきたものを資料として活用していました。それらのことから、佐藤先生が学びのつながりや積み重ねを大切にされているのだと感じまし

た。生徒たちが立てた献立は、採用されると実際に給食に出てくるそうで、見ていてとてもわくわくする、本当に面白い授業でした。また、生徒同士の関係性もあたたかく、協働的に学ぶ姿が見られると同時に、参観に来られていた先生方に嬉しそうに話しかけたりしている様子を見ていて、生徒の人懐っこさが感じられました。

半日間という短い間ではありましたが、本当に充実した時間を過ごせ、たくさんの学びを得ることができました。ここで得た学びをモチベーションに変えて、また明日からもインターンを頑張っていこうと思います。本当にありがとうございました。



教職専門性開発コース1年／啓新高等学校

宮川 翔太

この度は、研究発表会に参加させていただきありがとうございました。私は、「アクティブラーニング」をキーワードにどんな実践が展開されているのだろうと、興味津々で参加しました。

「主体的」、「探求」、「協同」という言葉たちは、私にとってまだまだ不明瞭でしたが、公開授業、分科会、研究発表を通して、考えるきっかけをいただくことができました。1年1組の英語科の授業を参観させていただき、グループ活動において、生徒同士がケアし合う姿があり、自分の役割を強く意識することなく、自然なながれのなかで互いを思いやる心が培われてきているのだな、と感じました。お互いにケアしあい、互いに認め合える信頼関係を築いていくことが「アクティブラーニング」の根幹として、赤塚二中に強く根付いていることがうかがえる場面でした。

このような強い根っこを築くことができたのは、赤塚二中の、先生方同士の結びつきが強いからこそであると感じました。東京と聞くと、どこか冷めているという印象を持っていた私ですが、

生徒について、授業について、教科について、学校について、教育について、年代も超えて熱く語られる先生方の姿がとても印象に残っています。先生方の熱い熱情のもとに行われている実践がこの学校を支えているのだと強く感じました。

教科センター方式を取り入れた新校舎ということで、東京都内の先生方や、板橋区の教育委員の方など、多くの教育関係者の方々がいらっやっていました。教科センター方式に対しての考えや、起こりうるリスクなどにも話が及び、様々な意見、見解を見聞きすることができました。きっと、福井には得られなかった経験ができたと思っています。

得られた全てを持って帰ることはできないかもしれませんが、今回参加させていただいたことをきっかけに、私の教育観をより深めていき、また、ケアすることで信頼関係を築くことを、私の中でひとつ大切にしていきたいと思っています。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

スクールリーダー養成コース1年／丸岡南中学校

中村 敏明

1月17日（金）に、東京都板橋区立赤塚第二中学校研究発表会が行われた。この学校は、丸岡南中と同じ教科センター方式の学校であること、そして、昨年まで福井大学教職大学院に在籍された岡部誠先生がいらっしゃる学校であるということで、随分前から参加を楽しみにしていた。

研究発表会当日、受付1時間前に学校に着き、どうしようかと迷っていたところ、ちょうど、森透先生と山下忠五郎先生が到着された。おかげで、一緒に学校に入れていただくことができた。さっそくお二人と一緒に校内を見てまわった。この学校は、昨年3月に改築・新校舎が完成したばかりということであった。見る視点はどうしても丸岡南中学校との比較で見えてしまう。歩き出すと、さっそくランチルームを見つける。全校生徒が一度に使用できるスペースではなく、学年集会などに使っているということであった。次に、階段状のホールを発見。この作りはまさに、丸岡南中の多目的ホールと同じであり、何かうれしい気持ちになった。そしていよいよ教科教室へ。各教科、教科専用の教室が3つありそれに隣接する「学びの広場」（生徒の学習成果の掲示や自学自習、グループ学習、プレゼンテーション等に対応したオープンスペース）、「教科教員室」がセットになっていた。教科教室とは別に、学級用教室も独立して作られていた。ちょうど、帰りの会前に教室前廊下にいらしゃった岡部先生に、学級用教室についてお聞きしたところ、「やはり学級の教室がないと不安感があった」というお答えであった。（ちなみに岡部先生は、教務主任をされながら学級担任もされているとのこと。「すごい」の一言である。）

授業は、岡部先生の社会科の授業を参観させていただいた。授業前に生徒は黙々とプリント学習を行っていたが、授業開始のチャイムと同時に、生徒主体での答え合わせが始まった。学力向上のため、ドリル学習にも力を入れていることが伺えた。授業が始まると、黒板の前に取り付けられた可動式の電子黒板を使い、資料を提示された。電子黒板を使って教科書に記載されたグラフを投影し、その要所に書き込みをされながら、生徒に問題を投げかけていた。生徒への問題提起がとてもわかりやすくなされており、ICT機器のより実践的な利用の仕方のモデルを見たような気がし

た。（さっそく、本校社会科教員にも、参観の感想として、電子黒板とはいかないまでも、実物投影機により現実的な効果を伝えたところ、ほぼ毎日のように皆で利用するようになった。）グループ学習では、まず生活班でグループが組まれたが、そのとき、4人1組で「T字型」で机を組むやり方を初めて見た。教員に背中を見せなくてもすむし、すぐに組める利点があるということだった。次に、生活班を解き、自由にグループを組んだ。このとき、教室横の「学びの広場」も使って、話し合い活動が行われていた。この「学びの広場」は、生徒の意欲付けというより、「生徒の主体的な学び」という現実的な目的のもと作られていることを実感した。

授業後に、分科会が行われた。この分科会は、参観した授業に関係なくグループが組まれていた。分科会后、赤塚二中のある先生に、「参観の視点が生徒の学びであるから、参観教科は関係ないということなのか」という質問をさせていただいたところ、「全くその通りである」という御返事だった。

最後に、木村優先生から、「授業改善・指導力向上とアクティブラーニング」という演題で、御講演が行われた。「なぜ指導力向上・授業改善が求められているか」という問いに始まり、「内発的動機付け」についての詳細なお話を聞かせていただいた。本校の授業研究の課題の一つが、「課題設定」である。思わず、ビデオをとりだし、撮影させていただいた。ぜひ、もう一度じっくり見させていただき、まずは、自分自身のしっかりした知識として習得していきたい。

今思い返してみても、つくづくこの研究会に参加させていただき良かったと思う。他県の優れた実践校を参観させていただくことで、本校の課題が見つかり、また逆に本校の良さも実感できた。この経験を、今後の丸岡南中での学校生活にぜひ生かしていきたい。また、今後の教職大学院での自分の研究を考えていく一つの視点として役立てていきたい。

学校と教育行政の連携・協働を補完する教職大学院の役割

—静岡大学ラウンドテーブルに参加して—

福井大学教職大学院 教授 松田 通彦

知見を広げるとともに、本学教職大学院の外部評価を実感したいという通俗の理由も手伝って、1月25日の静岡大学ラウンドテーブルに満を持して参加させていただいた。素朴な印象としては、午前の小グループでの実践報告、午後のシンポジウムともに同大学の熱い思いが溢れる価値のある研究会であったように思う。しかしながら、今回のキーコンセプトでもあった「教師の成長を支援する学校と教育行政のあり方」及びそれらをバックアップする教職大学院のアイデンティティーはいかにという視点で省察するとき、様々な思いの表出を抑止できない感情に支配されたのも事実である。紙面の許す範囲でそれらの整理を試みたい。



午前中私が参加したグループ協議では、静岡大学教職大学院講師の若手研究者をファシリテーターに、静岡県総合教育センターのスタッフお二人から、教員の資質能力向上に係る同センターの取組みを拝聴した。主にマネジメント研修に関して静岡大学教職大学院との協働研究の経緯や内容について極めて具体的に丁寧な報告がなされ、その後の意見交換は休憩時間も確保できないほど活発で満足のいくものであった。グループ内の小・中学校の校長や高校の先生方と、静岡の教育の現状について議論できたことも得難い経験になった。

惜しむらくは、筆者の理解不足が原因ともいえるが、大学との連携事例に今一つ目新しいものを発見できなかった点である。大学院の授業にセンター職員を参加させるとか、大学の講義をテレビ会議システムを活用して聴講したり、関係者間で年2回連携協議会を

開催する等、所謂、オーソドックスなプログラムが紹介されていた。関係者の地道な実践には敬意を表したいが、センターの職員が院生でありかつセンターそのものが大学院の研究拠点機関となっており、年間何十回もの研究協議を通して構成員全体の資質能力の継続的向上を図るといふ本学教職大学院と福井県教育研究所との協働実践研究の実態を知って、呆気にとられていた方々の顔が妙に印象的であった。と同時に、本学の取組みを全国展開すべく、タイミングを捉えての更なる発信の必要性を改めて再認識させられたセッションでもあった。

午後の公開シンポジウムは、静岡の教育を俯瞰しながら学校と教育行政のあり方に関して各シンポジストが見解を論ずる内容であったが、ところどころ本県の現状と対比しながら、これまた興味深く参加させていただいた。何かと課題の多いらしい静岡の教育について、個別具体の事例も聞きながら理解を深めたつもりであったが、とりわけ、「静岡県教育行政のあり方検討会」の座長でもある興直孝氏の主張が色濃く印象に残っている。氏は、現在、県の教育委員であられるが静岡大学の元学長でもあったことから、教育行政の現状と課題に関して展開された持論に通底する深い洞察と揺るぎない信念に対しては、心地よいシンパシーを覚えた。

同県の児童生徒の学力向上や教師力のブラッシュアップ対策等、喫緊の課題に対して正面から意見するつもりは毛頭ないが、難問山積の現状は概ね想像できた。昨年来、教育委員会制度のあり方について教育再生実行会議等を中心に広く議論されていることは周知のとおりであるが、『そもそも論』を述べるならば、教育委員のレイマンコントロールと教育委員会事務局のプロフェッショナルリーダーシップの絶妙のコラボレーションというのが、本制度の要諦であるはずである。その意味で、「今般の問題は、制度に欠陥があるのではなく制度の運用に課題があるのだ。」と言い切った氏の卓見には恐れ入った。全く同感である。

フロアの女性校長からの「行政はもっと学校現場を信じて支援を。」の発言には些かの異論もないが、当該教育委員会には拠って立つ使命を前に凛とした対応を期待したいものである。また、そのために教育委員会勤務の多くの指導主事を学校現場に戻せば、当面する課題が急転直下解決できるものでもないことは自明

でもある。当然のことながら、こうした脈絡において教職大学院の役割はいかにという議論の導火線に火が点けられるのであるが、この局面でもまた、学校拠点方式を基軸に教師教育改革を実践する本学のコンセプトの意味や価値が改めて評価されるはずだとの自信を強くすることができた。いずれにせよ、静岡の教育復活に向け遠くからではあるが熱いエールを送りたい気持ちに満たされた一日であった。

結びに、福井大学との共催で進められた今般の静岡

大学ラウンドテーブルは、総じて成功だったと評価したいと思う。もう少し他県から教員や教育行政従事者の参加があればベターであったともいえるが、参加者総数119名の実績はお互い今後の自信に繋げることができるものと確信する。この上は、同ラウンドの参加者間で確認された充足感と達成感を3月の福井ラウンドで再び共有していただけるよう、本学でも準備と調整に万全を期して参りたいと考えているところである。

福井大学教職大学院 教授 森 透

1月25日(土)10時から12時30分まで静岡駅前のホテルアソシア静岡で、静岡大学教育学部と福井大学教職大学院との共催によるラウンドテーブル「教師の成長を聴き合う」が開催された。具体的なテーマは「教師の力量アップを支える学校」と題し、参加者は県内外から100名を超える人数で、職種も現場の先生方、教育委員会などの教育行政、研究者等、様々であった。この静岡ラウンドと2月8日に予定されている宇都宮ラウ



ンドは、福井大学教職大学院が今年度予算獲得した教師教育改革コラボレーションの予算を活用して開催されるものであり、福井大学が進めている大学と学校がつながりあう学校拠点の協働研究について、及び静岡で取り組んでいる大学と学校、教育委員会との協働の姿を紹介し学び合う場であった。静岡大学世話人の渋江かさね先生のお話によると、このような小グループのラウンド形式は静岡では初めてであり、参加者がどのような思いで参加するのかが心配ということであったが、総じて実り多い内容であったと思う。静岡大学の関係者の中には福井大学のラウンドテーブルに参加されている方もおられて、ある程度のイメージは持たれていたこともその理由であろう。今回のラウンドには福井大学からは9名で参加した。

当日の朝9時20分から全体会場で報告者とファシリテーターの打ち合わせがあったが、各テーブルとも和気

藹々とした雰囲気であった。最初に私のほうから、開催趣旨として、様々な職種の方が小グループで(今回は参加者の関係で8名グループという若干多い人数となったが)、報告者はご自分の実践をじっくりと振り返り語ることに、聴き手は共感しつつ自分の実践と照らし合わせながら語ることを目指していること、そして静岡でも学会形式ではなく小グループで実践を語り聴きあう関係づくりが広まることを期待するということを述べさせていただいた。

10時から参加者全員による全体会が開かれ、その場でも私の方からラウンドの開催趣旨についてお話しさせていただき、10時15分ころから各分科会場に分かれ



て小グループでの語り合いが始まった。私はグループ5(学校のマネジメント)のファシリテーターをさせていただいたが、参加者は8名で、報告者の2名(高校の校長先生と教育学部長)及び中学校長2名、教育委員会教育長(元校長)1名、比較的お若い先生2名(教育センターと中学校)、それに私であった。まさしく丸いテーブルを囲んでのラウンドテーブルで、反対側の方との距離が若干離れていることが気になったが、最初の自己紹介がお互い初対面の中で学び合おうといういい雰囲気であったので不安は解消していった。

第1報告者の勢力稔先生(三重県立宇治山田商業高校長)は「高等学校におけるコミュニティ・スクールの実践研究—紀南高等学校学校運営協議会の実態から見た新

たな関係性一」と題して40分じっくり語っていただいた。報告者の前任校である三重県立紀南高校のコミュニティ・スクールの紹介であったが、長く県教委におられこのコミュニティスクール設置を準備されて校長になられた経緯を語られた。90年代後半の三重県は少子化による県立高校再編の中で、生徒数の減少による定員割れや「荒れ」も現実問題として噴出しており、学校や家庭だけでは解決できない多様かつ深刻な問題を解決するために、2年間の研究期間を踏まえて「地域の教育力」を組織化して2007年4月に全国の高校で3番目のコミュニティ・スクール指定校として出発したとのことである。この開校の背景として、学識経験者・教育関係者、地域関係者及び保護者等からなる「紀南地域高等学校再編活性化推進協議会」が設置され、地域に根ざした、地域に開かれた学校づくりが目指されたのである。紀南高校の目指す学校像（基本理念）は「生徒には希望を 保護者には夢を 地域には信頼を」が掲げられ、「推進協議会」を母体とした「学校運営協議会」が中核的な組織として機能していった。本分科会は「学校のマネジメント」であるが、校長の勢力先生が学校内と学校外を視野に入れ、「学校運営協議会」を形骸化することなく、日々丁寧にメンバーと連絡を密にして協働してマネジメントを遂行していったという熱い語りを受けて、なるほどと納得した。マネジメントは組織力であるが、一人一人の個人がお互いに関わり協働して連係プレーを有機的に行なうことが不可欠であることを改めて認識した。

第2報告は時間的に短くなってしまったが、梅澤収教育学部部長の「静岡大学教育学部・教育学研究科の改革の

取り組みから」と題する報告であった。報告の柱は、Ⅰ 現段階の教員養成政策の状況（①基本政策、②国立大学改革と教員養成教育の改革の取組み）、Ⅱ静岡大学の大学改革と教員養成システムの再構築（①地方国立総合大学の改革、②静岡大学の教員養成改革、③静岡大学の教員養成改革の今後の課題）の2点であった。本分科会は「学校のマネジメント」をテーマとしているが、小・中・高校のマネジメントではなく、大学におけるマネジメント、それも学部長という立場での率直な問題提起と課題が示された。筆者も福井大学の教師教育に長く関わっているため、教師教育・教員養成の非常なる難しさについては日々痛感している。特に最近の「ミッションの再定義」なるものについては、大学の自治を否定するものとして反撃したい思いが強いが、他方、安倍政権や文科省・財務省が主導する国家の高等教育政策に対して、大学人として主体的・自律的に教師教育・教員養成を究明し新たな展望を構築しなければならない責務も痛感している。梅澤報告は静岡大学の事例であったが、今回のラウンドが全国12大学の教師教育改革コラボレーションの一環として取り組まれたことを考えると、今後の大学間交流も視野に入れて、競争関係ではなく相互の信頼・交流と協働、そして新たな教師教育のビジョンの提起も行なっていく必要があると考えている。

最後に静岡大学の教職員が熱心にラウンドを組織し実り多い内容とされた事に対して敬意を表するとともに、学部長のマネジメントが大きな支持を得たと認識している。静岡大学の皆さまに対して改めて感謝の意を表したい。

福井大学教職大学院 特命准教授 前園 泰徳

2014年1月25日土曜日に、静岡大学教育学部と福井大学大学院教職開発専攻（教職大学院）によるラウンドテーブル、および、静岡大学教育学部主催の公開シンポジウムが開催されました。会場は静岡駅前のホテルという絶好の条件であり、県内外からのアクセスのしやすさを強く実感するとともに、大学キャンパスでは味わえない上質な雰囲気のおかげでのもてなし（ホテル従業員によるお茶のサービスなど）に感心しました。また、初開催ながら、ラウンドテーブルとシンポジウムを通して、静岡大学の皆様の綿密な計画や配慮を随所に感ずることができました。今回は、私自身の感じたこととともに、参加していた静岡県内の先生の様子を観て感じ取ったことを記させていただき、今後の静岡大学、そして、福井大学の双方にとって、より良い教師教育の体制を構築できる提言をすることを目標としました。

さて、まずラウンドテーブルでは、メインテーマを「教師

の力量アップを支える学校」とし、1部屋に120人ほどが入って活発な議論が行われました。初めて参加した方が多い割にはよく打ち解けており、目標とした「聴き合う」ということが実現できたように思います。私も急遽報告を依頼され、生物学の研究者であった自分が教師教



育に携わるようになった経緯や、福井大学の教職大学院での新鮮な学びについて話をさせていただきましたが、リラックスした雰囲気の中であったため、楽しく話をすることができましたし、その後の議論も盛り上がりましたので、充実した時間となりました。私が最も驚いたのは、もう1人の報告者のお話やその後の議論において知った、福井と静岡の教育の違いです。特に教職大学院の教育方法や募集人員に大きく異なる部分があることを知りました。例えば、現職の先生が静岡大学の大学院に所属する場合、静岡から離れた地域の先生では、静岡にアパートを借りて1人暮らしをすると聞き、その負担の大きさと、先生の高い志に驚きました。また、「教職大学院に通うことでどういったメリットがあるのか」という部分については、福井大学同様の課題を抱えていることもわかりました。個人的には、ESD（持続発展教育）を静岡大学でもすでに実践していることを知ったことも収穫でした。福井大学ではこれからがスタートなので、今後いろいろとお話を聞けるのではないかと期待しております。



同じグループの参加者は、最初こそ緊張が観られたものの、コーディネーターの働きかけもあって、徐々に打ち解けていくことができました。参加して「勉強になった」、「おもしろかった」、「良かった」という感想があったのは、このテーブルだけではないでしょう。多くのグループから拍手や歓声が聞こえていましたから。ラウンドテーブルはおおむね成功であったと思います。

ただ、少し気になったこともあります。1つのテーブルが大きいこと、1グループの人数が多いこと、テーブルの間隔が小さいこと、マスク着用者が多いことです。そのため、同じテーブルでも声が相手に通りにくく、しかも、他テーブルの音が気になる、という状況が生まれました。また、人数が多いことで、発言が少なくなってしまう方もいました。テーブルのサイズが生む距離感や、人数の少なさが生む親密感が、「聴き合う」際に極めて重要であることを認識する機会となりました。

午後の公開シンポジウムは、大きな会場にゆつたりと座ることができ、スクリーンも大きく、照明調整もできるため、設備としては大変行き届いたものでした。テ

マは「『成長し続ける教師』と静岡の教育」というものであり、ラウンドテーブルの参加者がこぞって参加することで盛況だったと思います。私としては、ここであらためて静岡と福井の教師教育の仕組みの違いを感じるとともに（例えば教育委員会と大学の連携や、研究所の機能）、静岡の教育に学力の問題や不祥事の問題があることを知りました（たまたま静岡に到着した日のニュースに教育関係が多かったことも影響していたと思いますが）。普段なかなか聞くことのできない内情を聞くことで、教師教育に携わる者として参考になった部分が多々あったのですが、特に後半は行政の問題ばかりがクローズアップされた結果、テーマの「成長し続ける教師」からは、徐々に離れてしまい、会場の参加者が議論に参加しにくいような印象を受けました。

現職の先生も同様の印象であったようで、ラウンドテーブルでは明るかった顔が、後半は徐々に疲れに変わっていったように感じたのは私だけでしょうか。同じテーブルだった先生にシンポジウム終了後に感想を聞いてみたのですが、「静岡の教育の問題点について再認識した」という意見の他に「とにかく疲れた」という意見がありました。「誰のためのシンポジウムなのか」という点をもう少し明確にする必要があるように感じました。

シンポジウムにおいて気になった点が、プレゼンテーションと資料の使い方です。スクリーンは大きかったものの、1ページに大量に文字やグラフを入れこんだものもあり、スクリーンでは見えにくい状態が多かったのが残念でした。今回のシンポジウムのための資料ではないものも含まれていたからでしょうか、途中で飛ばすページも見受けられ、参加者にとっては論点の絞り込みが難しかったのではないのでしょうか。資料の中にも文字が小さく薄暗い会場では読みにくいものがあり、それも参加者を疲れさせた一因になっていたようにも思えます。今後は、難しいことかもしれませんが、プレゼンでの発言内容をあらかじめ確認することと、各ページに入れる情報を最小限とすることなどを、事前に各プレゼンターに伝え、シンポジウム全体として、誰を対象に、何を目的とするのかを共有しておくことができればよいのではないかと思います。



以上、僭越ながら静岡での感想を記させていただきました。少々辛辣な意見もあるかと思いますが、より充実した教師教育を実現するとともに、より魅力ある教職大学院を築いていくうえで、高い目標を定めることが重要

であると感じており、あえて記させていただきました。今後の双方の活動において、1つでも参考になることがあれば幸いです。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

連携校だより

越前町立朝日中学校

林 明宏

私の教職大学院での学びも終わりに近づいています。「長期実践研究報告書」の執筆活動のまさにヤマ場を迎えている現在、この「連携校だより」を書いています。両者の締切が奇しくも同じ日というのは神様のいたずらでしょうか(笑)。

いささか皮肉が混じりましたが、本校の取り組みについて報告します。私は、教職大学院で生徒指導をテーマにして学んできましたので、この視点で報告させていただきます。

本校は旧朝日中学校と糸生中学校が合併して平成21年4月に開校した新しい学校です。生徒数は294名、職員数29名の中規模校です。

今、書店に行くと「～力」というタイトルの本であふれています。本校の強みは、この表現を借りると「『あたりまえ』の力」とも言えるかもしれません。例をあげます。

本校では授業が時間通りに始まることはまずありません。時間より早く始まるのが普通です。本校では「2分前入室、1分前自習開始」を推奨しているのです。

また、廊下を歩いていると、気持ちのよいあいさつが響きます。あいさつは、教師の方から積極的に声をかけるのが本校流です。



全生徒、職員がランチルームで楽しく給食

校舎内を歩いてもゴミが落ちていることはありません。清掃は黙動で行っており、遊んでいる生徒の姿は皆

無です。

これらは、本校の「あたりまえ」のごく一部です。開校以来、本校に勤務してきた職員の努力によって、「あたりまえ」にまで昇華することができたものです。というのも、本校の陰の校訓として「時を守る 礼を尽くす 場を浄める」があります。先に挙げた本校の「あたりまえ」が、この3つに対応していることがおわかりいただけると思います。

確かに、本校にも不登校や相談室登校その他の問題行動が存在します。授業に集中できない生徒がいたり、宿題忘れ常習者がいたりするなど、手のかかる生徒もおります。問題がないわけではありません。本校も普通の学校ということなのです。



中高一貫教育校のため、連携クラスは超少人数で充実した英数の学習

しかし、学期末に行ったアンケート調査によれば、実に95%の生徒が学校生活に満足しているということがわかりました。これも、本校の職員がやるべきことと粛々とこなし、生徒はそんな教師との堅い信頼関係の中で、これまたやるべきことを一生懸命こなしている成果だと思えます。これが「『あたりまえ』の力」なのです。

なぜ、本校はこのような好ましい運営ができてい

でしょうか。

今日の学校は、少数の万能な教師によって楽に運営ができるほど甘くありません。本校も同じです。ここでキーワードになるのが「協働」だと思うのです。

本校には、指導力の卓抜した熱血教師がいて、毅然とした指導の範を示してくれます。また、教材研究に没頭する研究熱心な教師がいて、真摯に授業を追究する尊さを教えてくれます。加えて、生徒との人間関係を何よりも大事にするカウンセリングマインドに富んだ教師がいて、生徒の話にじっくりと耳を傾けることの大切さを教えてくれます。

このように、本校の職員はそれぞれに優れた力を持っ

ています。その個性ともいえるべきそれぞれの得意分野をお互いが理解し合い、目標を共有することで、教員集団全体として大きな力を発揮することができると思うのです。

私は生徒指導主事として、微力ながら本校の「協働」に力を入れてきたつもりです。ですが、前段に述べたことについては、本校は発展途上であり、まだまだ伸びしろがあると思います。本校の「協働」が今後さらに進化することで、本校の「あたりまえ」はさらに高度なものになっていくはずです。それまで私なりにできることを精一杯やっていく所存です。

福井市藤島中学校

渡辺 裕幸

福井市藤島中学校は、各学年5学級、全校生徒441名（1/20現在）、教職員28名の中規模校です。明道中学校・光陽中学校・灯明寺中学校のマンモス化解消のために1984年に設立され、2014年は「学校創立30周年」という記念すべき年になります。

昨年度10月頃までの数年間、学校が落ち着かない状態が続き、教師は生徒指導上の問題の対応に追われました。また、生徒の方も、落ち着かない雰囲気もあって、授業に取り組む姿勢や家庭学習が不十分である状態が続いてきました。

このような現状を打破すべく、3年ほど前から少しずつ準備を始め、昨年度から

- ①「授業改革」
- ②「先手を打つ生徒指導」
- ③「特別活動の充実」（『クラウド制』導入）

の3つを学校改善のための柱として取り組んできました。

②「先手を打つ生徒指導」として、生徒が下校した後、「生徒指導会議」＜出席者：管理職・指導部長・教務主任・各学年主任・各学年生徒指導担当の約10名＞が毎夜開かれてきました。その会議では、「『その日にあった問題行動』『その時の対応』についての報告」、更に「『今後の方針』を出席者全員で共有」ということが行われました。その会議は、1時間を越える時もありました。各学年主任は翌朝、会議での共通理解事項を、学年のスタッフに伝えていきました。問題行動が起きてからの後手に回る指導ではなく、「今日1日の実践を生

徒の動きから省察する」とこと「新たな問題行動を予見して次の一手に出る」という新たな視点による生徒指導を推進してきました。

また、生徒の問題行動に対し後手に回る指導に追われるあまり、容儀服装規定をはじめ生徒指導に関する事項が「形式知」として文書化されることなく、「暗黙知」として口承されるという事態に陥っていました。ここ2年間で職員の2/3が異動し、「暗黙知」による指導には限界が来ていました。そこで、昨年度から指導部長を中心に、生徒指導に関する事項を文書化して「形式知」として伝承していけるよう取り組んでいます。

③「特別活動の充実」として、生徒相互の関係を強めるために、5つの縦割り集団「クラウド」による活動を推進し、生徒自らの力で問題を解決する意識と実践力づくりを進めてきました。上級生が下級生に指導する場面を設定することで、生徒に責任と自覚を持たせることになり、「上級生になるにつれて荒れる」のではなく「上級生になるにつれて成長していく」学校に変わりました。

①「授業改革」について、研究主任である自分が思い入れを持って取り組んできました。

学校を落ち着かせる手段の一つとして、教師が今一度、授業のあり方を見直す必要性を感じました。また、授業を通して生徒との信頼関係をより強固なものにしていくことが今の藤島中学校に求められていることではないかと考えました。そこで、「習熟度の低い生徒でも授業に参加できる手だての工夫」や「塾で既に学習している生徒に深く考えさせる課題や発問の工夫」などの手法を取り入れ、これまでの「教え込む」授業からの脱却を

はかり、教師と生徒がとものつくりあげる「授業参加度の高い授業」へと転換することが必要だと考えたのです。

昨年度、「生徒が学習参加する授業の創造」という研究主題の下、授業改革に着手しました。授業参観の視点も大きく変え、「授業者の指導について追う」のではなく、「生徒の学びを追う」ものへと転換しました。また、授業参観後の「授業研究会」も、「指導について」のみ語るのではなく、「生徒の学びの姿」を語り合う中で授業者の指導についても言及していくという形へと大きく転換しました。

こうした1年間の準備を経て、今年度は更に一步踏み込み、「生徒が協働学習する授業の創造」という研究主題を掲げ、「質の高い授業を行うことにより生徒を変え学校を変える」という強い決意を持って授業改革に取り組んできました。従来行ってきた、「中学校区教育を意識した3つのグループ（「授業づくり」「生き方教育」「子ども支援」）」による研究ではなく、研究組織を大きく変え、授業改革に特化した研究を進めてきました。福井大学附属中学校の研究組織「部会」のシステムを取り入れ、教科や経験年数が異なるよう配慮した6名ほどによる4つの部会を構成。「1人1授業公開」を部会ご



とに行っています。時間割を調整して部会メンバー全員で授業を参観し、生徒の学びを追った授業記録をとり、放課後の授業研究会で「生徒の学びの姿」について語り

合うことをしてきています。確かに、時間割の調整が難しかったり、人によっては手空きの時間がなくなってしまったりするなど困難な事もいろいろあります。しかし、12月の「部会研究会」にて「部会ごとの授業公開」についての省察を行ってもらったところ、次のような感想が寄せられました。

- ・ 授業を全て見てもらう機会がほとんどないし授業に関する指導を受ける機会もない。それを考えると校内の「1人1授業公開」で意見をもらえることはありがたい。
- ・ 他教科の先生に授業を見てもらうことで、新たな視点ももらえて良かった。
- ・ 他教科の授業を見ることは新鮮で、勉強になった。生徒理解・教師相互理解にもつながって良かった。
- ・ 同じメンバーで授業を見合うことにより、メンバーの話し合いも回を重ねるごとに深まって良い。

「難しい面はいろいろあると予想されるが、とにかく1年間やってもらい、現状に合うよう次年度に変更してもらえば良い」と考え取り組み始めました。批判的な感想が多数出てくると覚悟していましたが、「時間的にはつらいけれど勉強になる。続けていくべきだ。」という意見が大多数であったのには正直驚きました。教職員みんなの「授業が大切だ」との思いを改めて感じることができ、本当に嬉しいです。

ここ数年の荒れた本校の状況では、授業を成立させるだけで精一杯で、「授業改善」や「授業改革」について取り組むことができませんでした。いよいよ新しい藤島中学校を創り出すための動きが始まりました。この新しい動きを本格的なものするために、福井大学教職大学院に今年度1人入学しました。来年度にまた新しい仲間が入学します。藤島中学校は、これからが楽しみな学校ではないかと感じています。

高浜町立和田小学校

山本 毅

本校は、福井県の最西端に位置する高浜町にある児童数128名の小規模校です。学校から徒歩5分のところには、環境省より「日本の快水浴場百選」に認定された若狭和田海水浴場があり、夏場には県内・外から訪れる観光客で賑わいを見せています。この海水浴場に広がる広大な砂浜を格好の学習の場とすべく、平成12年度から本校において砂浜体育・砂浜運動会が取り入れられました。現在においても、この地域の特性を生かした体育学習（砂浜体育）・クラブ活動（ビーチフットボー

ル）・体育的行事（砂浜体育大会・ビーチマラソン大会）を通して、児童の心身の健康と体力の向上を図っています。

さて、本校では、昨年度より学校教育目標に「認め合い、つながり合う子どもの育成」を掲げ、「豊かにかかわり合う心」・「確かな学力」・「健やかな心と体」の育成に重点を置いた日々の取組と実践に臨んできました。その中で、教員と子どもが目指すビジョンを共有しようと、合言葉「やさしく、かしこく、元気よく！」を

共に口にしながら、毎日の学校生活を送っています。

一方、本校は福井大学教職大学院の連携校として、今年度で4年目を迎えました。教職員13名の中には、教職大学院在学中の自分の他に、同大学院修了生が2名在籍しており、教職大学院と本校との連携において理解ある同僚性を築いています。それが、「協働」と「学び合い」を基軸に据えた日々の研究につながっていると言えます。

今年度4月に、本校は算数コア・ティーチャー養成事業（2ヶ年）の指定を受け、「算数科における活用力を育てる工夫」を研究主題に据えて、教師集団で授業研究に取り組み始めました。研究主任が中心となり、授業の進め方・学習課題の設定の仕方・ノートまとめ方・学習後の振り返り方など、学年の枠を越え、学校全体で共通認識を図りながら授業づくりの研究を行っています。また、全学級において算数の授業公開を行いました。今年は授業づくりの段階から協働して取り組もうと、低学年部会（1～3年担当）と高学年部会（4～6年担当）に全教員を振り分け、事前の授業案検討会を実施しました。検討会は、各部会で行った後、嶺南教育事務所研修課長を招いてもう一度行い、練り合いの場としました。このように、外部の視点からの意見も取り入れながら協働して一つの授業をつくっていきました。公開授業は全教員が参観し、「子どもの見取り」を行いました。見取りについては4年前から取り組んでいるため、授業参観の手法としてほぼ定着しています。教室を3つのエリアに分けて、事前に見取る範囲を決めておき、各教員は指定されたエリアの子どもを見取っていきます。事後の授業研究会では、同じエリアの子どもを見取った教員がチームとなり、小グループに分かれてのワークショップ型研修に臨みました。子どもが「どのように学んでいたか」「どのようなつまづきを見せていたか」「どのような学び合いをしていたか」「どのような気づきを見せていたか」など、特定の子どもの様子を付箋に記入し、それらを模造紙（画用紙）に貼り出していくことで、一人一人の子どもの学びに焦点を当てた語り合いから授業についての深い洞察につながっていきました。最後は、各グループごとに語り合った内容を、模造紙（画用紙）

を提示しながら全体で共有していきました。

この小グループ・ワークショップ型研修については、教師集団の協働のもとに確かな成果が得られるようにと試行錯誤の上、少しずつ改善を試みながら継続して行ってきました。その結果、本校において研修会そのものが、教師集団の「協働の場」・「学び合いの場」となりつつあることは大きな成果と言えます。



今年は「算数の授業づくり」を切り口に、教師集団のつながりが生み出されてきたように思います。「算数ノートコンテスト」の実施で、各学年の子どものノート記述を見合う機会を持つことができ、よりよいノート指導について語り合うことができました。また、各学級の教室に「算数コーナー」が設けられ、学習成果の定着のためにどのような工夫ができるかを教室掲示から学び合うことができました。そして、玄関口に開設された共通の「算数コーナー」には、学びの成果をいかに生活の中で活用できるかということを学校全体で確かめ合っています。このような教師集団の協働と学び合いが、日々の授業における子どもの協働と学び合いを生み出すことにつながり、「認め合いとつながり合い」の中で、どの子どもも学びを深めていけるようにしていきたいと思えます。



実践し 省察する コミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル
2014 spring sessions

2014.3.1-2

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）／AOSSA

3/1 Sat. 12:40-17:40

Zone A 学校 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ／世代を超えて協働する学校

6月のラウンドテーブルでは学校を中軸に置きながら、地域や家庭といった学校の外にまで広げた協働について考えてきました。そこで今回はもう一度、学校の中に視点を戻し、テーマ「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」を前提に、「世代を超えて協働する学校」として学校づくりを捉え直します。前回のラウンドテーブルで課題となった「やらされ感」や「教師間の温度差」を超えて、本当のコミュニティを育み、自校の改善に協働して取り組んでいくためにはどうしたらよいか。管理職、ミドルリーダー、若手教員等、それぞれの立場で学校づくりを語り合う中で、「世代を超えて協働する学校づくり」について、お互いに考えを深めていきたいと思います。

Session I ポスターセッション 12:40-13:50 教育系1号館 1階 ロビー

福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援学校から、世代を超えてつながりを生む学校づくりの実践についてポスター報告が行われます。ポスター報告にもとづき、各校及び参加者で互いの実践を交流します。

Session II シンポジウム 14:00-15:20 教育系1号館 2階 大2講

「世代を超えて協働する学校」

〈報告者〉福井市至民中学校 校長 淵本 幸嗣

平成20年度移転開校となった至民中学校では、教科センター方式、クラスター制等さまざまな新しい取り組みを実践してきました。また、今年度は70分授業を発展的に解消し、新たな展開に挑戦しています。学校を組織として運営することについて校長としての実践を語っていただき、「世代を超えた学校づくり」についてご提案いただきます。

〈報告者〉東京都板橋区立赤塚第二中学校 教諭 岡部 誠

福井大学教職大学院拠点校である赤塚第二中学校では、「つながり力」のある学校として、授業改善を柱とした協働研究を進めています。今年度は教科センター方式を導入した新校舎となり、さらなる深化を図っています。ミドルリーダーの先生から協働研究についての実践を語っていただき、「世代を超えた学校づくり」についてご提案いただきます。

〈講演者／コーディネーター〉 鳴門教育大学教職大学院 教授 佐古 秀一

学校組織マネジメントについてご研究の佐古氏に、「世代を超えて協働する学校づくり」という観点からご講演いただき、さらに2校の報告についての意義をお話させていただきます。

Session III フォーラム 15:30-17:30 教育系1号館 1階 12・13・14講

先の2つのSessionを受け、それぞれの立場で学校づくりに挑戦している福井県内外の管理職・ミドルリーダーから協働を生むための具体的な取り組みと現状について報告していただきます。管理職・ミドルリーダー・若手教員等で構成したラウンドテーブル形式で、まさに世代を超えて協働しながら、各校の挑戦を傾聴し、議論し、共有していきたいと思います。

Zone B 教師 教職大学院をイノベーションする

中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上策について」（2012. 8.28）と、それに続く、教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議報告「大学院段階の教員養成の改革と充実等について」（2013.10.15）及び教員養成系学部大学のミッションの再定義では、教職大学院の拡大・拡充と修士課程の教職大学院への段階的移行が謳われており、各大学は第2期中期目標期間内におおよその方向性を確定する状況にあります。教職大学院の設置はグローバル化した知識基盤社会の到来に伴い、新しい学力観を持った「学び続ける教員」の育成という喫緊課題に応えるべく設置されるもので、そこでは教育委員会の連携・協働も必須となります。各大学ならびに教育委員会はこの至上の命題と落莫たる現状との狭間の中で模索されていることと思います。福井大学も全く同様の状況にあります。教職大学院の設置が比較的早く、解決できた課題もあります。

このような教師教育改革をめぐる現在の動向に鑑み、今回のZone Bでは「教職大学院をイノベーションする」と題し、教職大学院設置の実現化に向けた課題と方策を明らかにしていきます。特に、これから教職大学院の設置を予定する大学関係者ならび教育行政関係者の一助となることを願い、「教職大学院の創り方を考える」をテーマとして広く皆様方に公開し、セッションを進めていきます。

Session I ポスターセッション 12:40-13:50 教育系1号館 1階 ロビー

インターンシップ、教員養成・現職教育に関する教育委員会、学校、大学・大学院、大学院生によるポスター報告に基づき、参会者と共に互いの実践を交流します。

Session II シンポジウム 14:00-15:20 教育系1号館 6階 コラボレーションホール（予定）

「教職大学院をイノベーションする」

- 〈報告者〉十文字女子大学 学長 横須賀 薫
- 〈報告者〉文部科学省高等局教員養成企画室 室長 佐藤 弘毅
- 〈報告者〉和歌山県教育委員会学校教育局長 岸田 正幸
- 〈司 会〉福井大学 教授 松木 健一

Session III フォーラム 15:30-17:30 教育系1号館 6階 コラボレーションホール（予定）

「教職大学院の創り方を考える」

シンポジウムの議論をうけて、参会者全員で「教職大学院の創り方」に関する指針や方向性について議論を進めていきます。

話題提供大学（予定）：東京学芸大学、鳴門教育大学、静岡大学、玉川大学、上越教育大学、宇都宮大学、大阪教育大学、福井大学



Zone C コミュニティ 学び合うコミュニティを培う

この間、Zone Cでは、コミュニティの発展における「持続性」の問題を共有し、検討してきました。知識基盤社会という言葉に象徴されるように、21世紀を生きる私たちが地域や職場で出会っていく課題は、個人的・個別的な取り組みでは必ずしも解決しえない、より複雑で高度なものへと変化し続けています。地域の発展を支える自治や学習についても、その持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われています。これは、コミュニティの持続的な発展に向けて、世代をこえてつながり学び合うことをどのように支えていくことができるのかという課題です。

Zone Cの会場は、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、前回に引き続きJR福井駅東口前のAOSSAとなりました。地域・世代・領域をこえて互いの実践の展開を捉え直し、<人や組織をつないでいくこと>、<世代のサイクル・新しい実践の担い手>、<コーディネーターの力量形成>といった視点から上記の問いを深めていきます。また、シンポジウムでは「**持続可能なコミュニティをコーディネートするーコミュニティをひらき支える広報と記録ー**」というテーマの下、コミュニティの持続的な発展と実践者の専門的力量形成を支える広報と記録の持つ力に注目した問題を提起します。

Session Iは、ポスターセッションです。AOSSAのフロアをまたぐ空間的な広がりの中でポスターが設置され、それを通じて互いの活動を交流しあいます。Session IIのシンポジウムでは、下記の方々に登壇いただき、コミュニティの持続的な展開を支える広報と記録、コーディネーターの役割をめぐる議論の方向性を探っていきます。Session IIIのフォーラムでは、シンポジウムでの問題提起を受けながら、6人程度の小グループを組み、地域・世代をこえて互いの活動を交流・共有していくクロスセッションを進めます。多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ち申し上げます。

Session 0 オリエンテーション 12:40-12:50 AOSSA 6階（参加受付ブースあり）

Session I ポスターセッション 12:50-13:50 AOSSA 1・4階アトリウム

「世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートする」

福井市・越前市公民館 福井市教育委員会生涯学習室 福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」実行委員会 福井大学探求ネットワーク 明治大学 早稲田大学 東京学芸大学 玉川大学 他

Session II シンポジウム 14:00-15:20 AOSSA 6階レクリエーションルーム

「持続可能なコミュニティをコーディネートする ーコミュニティをひらき支える広報と記録ー」

〈シンポジスト〉NPO法人参画プラネット（名古屋市）
福井市公民館

〈司会〉村田 晶子（早稲田大学）・熊野 直彦（福井市教育委員会事務局生涯学習室）

Session III フォーラム 15:30-17:30

小グループでの実践交流

* 3月1日、Zone Cの会場は福井駅東口のAOSSAになります。2日目の実践研究福井ラウンドテーブルの会場は福井大学文京キャンパスです。ご注意ください。



Zone D 授業 授業改革の扉を開く - 「問い」はどこから生まれるのか -

授業には、様々な「問い」が存在します。子どもと文化や社会をつなぐ「問い」、モノや人との対話を促し関係を編み直す「問い」、学習のプロセスを発展させていく「問い」といったように、異なる役割を担った「問い」が存在しています。また、学級全体で共有する「問い」、一人ひとりの子どもたちの「問い」、指導者の「問い」と、その所有者も異なります。さらには、長い単元を貫く「問い」、複数の教科等をまたぐ「問い」、1時間の中で変容していく「問い」、授業後も継続する「問い」など、「問い」が生きる領域や時間も様々です。ただ、どのような「問い」であっても、それらの「問い」を求めていく者にとっては、思考の場をデザインしていく重要な要素となるでしょう。

今回のZone Dでは、こういった様々な「問い」と向き合い、それらを導き出したルーツを模索しながら、授業改革への扉を開くための課題に迫っていきたくと考えています。

Session II では、ESD（持続可能な発展のための教育）に取り組まれている実践者の報告を基に、テーマを共有するための議論の場をつくります。Session III では、教職年数も担当教科（算数・理科・社会）も異なる3人の実践者たちに、「問い」との関係性に着目した授業実践について語っていただき、グループ協議へとつなげます。「問い」のルーツを模索することで、意外な役割、所有者、時間軸の視点から、授業を捉え直すことができるのではないかと期待しています。

Session I ポスターセッション 12:40-13:50 教育系1号館 1階 ロビー

授業改革を目指して取り組んできた実践者たちが、自らの授業実践とその省察をポスター発表します。「問い」はどこから生まれたのか、といった視点をもつことで、互いの実践の交流が深まることでしょう。

Session II シンポジウム 14:00-15:20 教育系1号館 1階 11講

「問い」はどこから生まれるのか

～ESD（持続可能な発展のための教育）の実践を通して～

〈報告者〉富山市立堀川小学校 教諭 杉林 千里

〈報告者〉勝山市立勝山北部中学校 教諭 齋藤 英市

〈コーディネーター〉福井大学教職大学院 非常勤講師 富永 良史

Session III フォーラム 15:30-17:30 教育系1号館 1階 11講

「問い」はどこから生まれ、どこを目指すのか ～「問い」のルーツから実践を捉え直して～

〈報告者〉鹿児島県与論町立与論中学校 教諭 今村 忍

〈報告者〉石川県能美市立寺井小学校 教諭 北川 茂

〈報告者〉福井大学大学院 教育学研究科2年 後藤 歩実

3/2

Sun. 8:30-14:00

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたくと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面に共有し成長のプロセスを探っていきたくと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

ESD(持続発展教育)シンポジウム

ラウンドテーブル同時開催・福井大学初!

ESDって何?

持続可能な社会へ向けた学校教育とは?

持続可能な社会を創ることが、社会全体の課題になってきています。福井大学でも「地(知)の拠点整備事業」に採択され、福井県における持続可能な環境・社会づくりへの貢献を目指しております。そこで、この度、福井大学初となる、ESDシンポジウムを実施し、ESDの周知と取り組みの共有を目指します。ESDとは「持続可能な発展のための教育」を示します。今回は、そもそもESDとは何か、何をすれば良いのか、学校教育がどう変わるのか、をテーマとします。持続発展教育は、教員だけでなく、社会全体が関わる教育です。多くの方々の参加を期待します。

日時: 2014年3月1日 午前11時~12時

場所: 福井大学 教育系1号館

申込み不要・参加無料

発表者: 富山市立堀川小学校 校長 高木要志男

岡山理科大学理学部 教授 岡本弥彦

コーディネーター: 福井大学 特命准教授 前園泰徳

共催: 福井大学、一般社団法人 大学コンソーシアム石川

後援: 福井テレビジョン放送株式会社、株式会社 日刊県民福井、ふくいユネスコ協会



Schedule

2/15 sat 長期実践研究報告会

3/1 sat-3/2 san 実践研究福井ラウンドテーブル

【編集後記】

2014年スタートの1月は、福井にはめずらしくよい天候が続きました。快晴の日には、大学6階のコラボレーションホールから見える真っ白な白山連峰の美しさに魅了されています。

今号では、冬の集中、新校舎で教科センター方式を始めた赤塚第二中学校の研究発表会、ラウンドテーブル形式が初めてという静岡大学ラウンドテーブル等での交流や学びを紹介しています。また、3月1日、2日に開催する福井でのラウンドテーブルの各ゾーンの具体的な内容紹介も載せました。3月には多くみなさんの参加をお待ちしています。(二宮秀夫)

教職大学院Newsletter No.59

2014.2.15発行

2014.2.15印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp

